ほんの少しの勇気

深本　弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんの少しの勇気

【Ｎコード】
Ｎ９３７６Ｖ

【作者名】
深本　弥生

【あらすじ】
ノートの隅の一言は、私と彼を繋げてくれた。
見ているだけだった隣の君にほんの少しの勇気を出して、伝えた。
※本作品は以前公開していた「ほんの少しの勇気」を加筆修正したものです。

1．ほんの少しの勇気

あ、寝てる。

先生が一人で音読している呪文のような古文を目で追うのに飽きて、隣の席をちらりと見ると隣の樋口くんが、自分の腕を枕に顔をこちらに向けて目を閉じている顔が目に飛び込んできた。

いつもは真面目に授業を聞いているか、机の陰で本を読んでいるかどちらかなのに、珍しい。

気持ちよさそうに寝ている彼を見ていると、なんだか微笑ましくなって緩みそうになった口元を慌てて引き締める。

しばらく眠っている彼を見つめ、目を開かないことを確認してから私もゆっくりと樋口くんと同じ体勢になって彼の顔をじっくりと見つめる。

薄い唇にすっとした鼻、キリッとした一重の切れ長な目。

大正モダンが似合いそうな文学少年のような彼は、その外見を裏切ることなくよく本を読んでいる。学校の教科書に載っているような純文学だったり、海外文学だったり、ライトノベルだったり、話題のベストセラー本だったりと本のジャンルはさまざまである。

私もその本読んだよ、とか。その本おもしろい？　とか。

静かに本を読むその横顔に話しかけたいと何度も思っていたけれど、勇気のない私はただ黙って彼を見つめるだけ。

彼を見つめるようになったのはいつからだったとか、きっかけはなんだったとか、そんなことは覚えていない。

ただ気がついたら、静かに穏やかに本を読む樋口くんの姿に目を奪われていた。

「辺見さん」
名前を呼ばれて、ゆっくり顔を上げると隣の樋口くんが困ったように笑っていた。
いつの間に寝てしまったのだろう。頭が重い。
ぼーっとした頭のまま黒板を見ると数人のクラスメイトが何か黒板に書いている姿があった。
「次、当たるんじゃない？」
「……え」
「現代訳。席順に当たってるから次は辺見さんだと思うよ」
「え、あ、ありがとう……！」
樋口くんに当たる場所を教えてもらったおかげで、なんとかみんなの前で恥をかかなくて済んだ。

「ひ、樋口くん」
授業が終わり、本を読もうとしている樋口くんに決死の思いで話しかける。
「ありがとう、あの……助かった」
「すっごい気持ちよさそうに寝てたね」
かぁっと顔が熱くなるのがわかる。彼の寝顔を見ていたのにっ！
逆に見られるなんて恥ずかしすぎる！
「ノート、見る？」
「え？」
「辺見さんが寝てたところ、テスト出るって言ってたよ？」
「うそっ！？」
「僕のでよかったら、どうぞ」
「あ、ありがとう！」
樋口くんは私にノートを手渡してから友達のところに行ってしまった。
手渡されたノートをぱらぱらとめくると、樋口くんの字がノート

の上でキレイに整列していた。
字、キレイだな。
写し終わった彼のノートをぼんやりと眺める。指でくるくると回していたシャーペンを持ち直す。
『好き』
書いた後、我に返って消しゴムを手にした。

2. ノートの隅の一言

これ、って……

家に帰り、復習のために古典のノートを開くと目に入ってきたのは見覚えのない丸い文字。

僕が書いたんじゃないってことはこの丸い可愛い字は、今日このノートを貸した隣のあの子の字なのか？

「好き、って書いてあるんだよな、これ……」

まじかよ。いやいやいや。本気にしていいのかこれ。

ノートを返してくれたときの辺見さんの様子に特に変わったところはなかったし、僕の思い違いってことも……

続きが気になってほとんど徹夜で本を読んでいたため、今日の授業は本当に目を開けていられなくてつい机に突っ伏してしまった。

多分僕が寝ていたのはほんの数分だったのだろうけど、目を開くと隣の辺見さんがこちらに顔を向けてすやすやと眠っていた。

どこか小動物を思わせるその顔に幸せそうな寝顔が浮かんでいる。

彼女を意識しだしたきっかけはなんだったか。

思いだせないほど些細なことだと思うのだが、思いだせない。本を読んでいる僕の姿をいつも控えめに見ている彼女の姿を視界の端に捉えるたびに、何度期待したことか。

もんもんと考え続けたが答えは見つからないまま朝になった。

学校に行くと辺見さんは既に席についていて、何か本を読んでいた。

「……何読んでるの？」

僕が声をかけると辺見さんはびっくりしたように肩を上げて、恐

る恐るといったような様子で僕を見上げる。
「樋口くんがこの前読んでいた本……。すごく楽しそうに読んでたから……」
やばい。それはやばいよ、辺見さん。
一気に、もっていかれた。
辺見さんが掲げた本は僕がこの前読んでいた、一番お気に入りの作家の一番好きな小説だった。
自分が一番好きな小説を、自分の好きな子が、自分の様子を見て読んでいる。
「その本、おもしろい？」
「うん！　昨日の帰りに買ってから読むの止まらなくて……ちょっと寝不足気味なんだ」
自分が一番好きな小説をおもしろいと言って、寝る間も惜しんで読んだという。
まいったなぁ……
読書好きにとってこんな嬉しいことは多分、他にはめったにない。
「辺見さん……」
「なに……？」
「昨日、僕のノートに何か書いた？」
そう聞くと、辺見さんは顔を真っ赤にして僕から視線を逸らす。
なんだかその様子が可愛くて、僕はくすくすと笑ってしまう。
「か、書いた……かも……」
「僕も辺見さんのことが好きだよ」
ガタンという音とともに辺見さんが後ずさって、椅子ごと壁に激突した。
「大丈夫？」
「え、あ、う……うそ……」
「ほんと」

ノートの隅に書かれていたたった一言は、僕と彼女を繋げてくれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9376v/

ほんの少しの勇気

2011年8月19日20時07分発行